

編集後記

中村学園大学 流通科学部

山田 啓一

11月中旬に、台風30号がフィリピン中部ビサヤ地方を襲った。レイテ島を中心にサマル島など付近の島々を強風と豪雨が襲い、とくにレイテ島の中心であるタクロバンでは高潮により町全体がほとんど消失するという事態に見舞われた。フィリピン政府によると、死者は3,976人でいまだに行方不明者が約1,600人いると発表された。

これに対して、各国から支援物資や緊急援助隊などが送られており、支援活動が続けられているが、とくに印象的なのは、日本の自衛隊と米国海兵隊が現地で支援活動を行っていることである。かつてレイテ島は、太平洋戦争の激戦地であり、米国を中心とする連合国と日本軍が戦った因縁の地でもある。しかし、戦後約70年が経過しようとしている現在、日米が協力して被災地の救済にあたっている。あらためて「平和の尊さ」を感じざるを得ない。

東アジアに目を転じると、反日運動が激化し、日中韓の関係がとみにぎくしゃくしてきている。領土問題、歴史問題、韓国にいたっては従軍慰安婦問題と、戦後70年も経とうとしているのに、まだ解決にいたっていない。それぞれの国において立場の違いがあろうが、それぞれの国の未来、子孫の幸福を考えると、話し合いを通じて、お互いの立場を理解しあい、一刻も早く解決に向けて努力してほしいと願うばかりである。